

常三島遺跡の船入状遺構

埋蔵文化財調査室室長

定 森 秀 夫

埋蔵文化財調査室は、工学部実験研究棟（電気電子棟）改修に伴う埋蔵文化財発掘調査を02年5月20日から7月30日まで実施した。調査の最大の成果は、上層に17世紀後半から18世紀にかけての「石組み船入状遺構」、下層に17世紀前半の「素掘り船入状遺構」を重複して検出したことである。



写真1 素掘り船入状遺構

その一部を確認したのみであるが、出土遺物から17世紀前半と推定された。この時期、現在の工学部付近は安宅島と呼ばれ、国文学研究資料館史料館所蔵『御山下画図』（寛永年間製作と推定）には阿波藩の「船置所」が描かれている。この絵図には助任川から西に向かう水路が見られる。この水路から南側に入る船着場を造っていたと推測すれば、「素掘り船入状遺構」はそれに該当する可能性が非常に高い。この公的な「船置所」は、1639年に福島安宅へ移される。

「石組み船入状遺構」（写真2・3）は、幅約5m、深さ約1.1mの素掘りであるが、その西側に緑泥片岩の石組み護岸を構築している。石組みは北側へ延びていくと思われるが、攪乱によって破壊されている。「素掘り船入状遺構」の上に設置され、17世紀後半から18世紀の遺物が出土している。この時期には、すでに福島安宅に新「船置所」が建設されている。一方、17世紀中頃に旧安宅島は



写真2 石組み船入状遺構（東より）

宅地化されていくことが個人蔵『阿波国徳島城之図』（1646年）の絵図で確認され、この地は民澤家の屋敷地となる。絵図には描かれていないものの、17世紀前半の旧安宅島「船置所」施設を宅地化以後も利用して、宅地内に船入を造り、私的な水運を行っていたと考えられる。

「素掘り船入状遺構」は徳島城下町で、そして全国でも江戸時代初期の特殊遺構として、「石組み船入状遺構」は常三島遺跡では初めての石組み遺構として、極めて貴重な発見と言える。石組み部分に関しては、埋め戻して保存されることになった。この部分は新電気電子棟の渡り廊下

となる。完成時には、「石組み舟入状遺構」の位置を廊下床面に表示すると共に説明板を床に埋め込む予定である。国民共有の財産である埋蔵文化財の一部を後世の人々に残していくこと、遺構の位置を示し説明することは、歴史教育や埋蔵文化財保護、そして大学・社会における教育普及活動にも大いに意義のあるものである。



写真3 石組み船入状遺構（南東より）

写真1 素掘り船入状遺構（写真下の落ち込みが「素掘り船入状遺構」、写真上に「石組み船入状遺構」の南端石が見える、西より）